

筋ジス患者らの分身に

仙台西多賀病院

ロボット「オリヒメ」導入

小さなロボットが患者の分身として会議に参加したり、コンサートの演奏を聴いたり。体が思うように動かない筋ジストロフィーの患者らの意思表示や外出の疑似体験を助けるロボット「OriHime(オリヒメ)」を仙台西多賀病院(仙台市太白区)が導入した。「その場にいる気分になれる」と患者の評価は上々だ。



タブレット端末でオリヒメを遠隔操作し、病室から会議に参加する大友さん

代わりに会議出席、外出も「その場にいる気分」

オリヒメは高さ21センチ、カメラやマイク、スピーカーを搭載し、インターネットを介してタブレット端末で操作する。体を動かすことが困難な患者に代わってオリヒメがうなずいたり、拍手したり。離れた場所にいる人ともコミュニケーションをとることができる。

病院のホールで10日にあった夏祭りの準備会議。筋ジスを患い入院する大友和弘さん(31)がスタッフの介助を受け、病室のベッドに横たわったままオリヒメを遠隔操作して参加した。司会が「夏祭りの出し物はこれでいいですか」と大友さんに尋ねると、ホールに置かれたオリヒメが拍手で応えた。「ポスターを作ってくださいか」との問いに、大友さんはオリヒメの



身ぶりやスピーカーからの発言で患者の意思を伝えるオリヒメ

スピーカーを通じて「はい」。会議後、大友さんは「自分の考えを伝えられた」と喜んだ。
6月の導入以降、病院はオリヒメをさまざまなイベントで活用。オリヒメのカメラを通してコンサート会場や街の映像をプロジェクトに映し出すことで、体調や移動手段の問題を抱える入院患者も外出の疑似体験を楽しんでいる。

筋ジスのため30年以上病室で過ごす小貴崇さん(44)は自作曲を他の人に演奏してもらい、音楽活動を続ける。オリヒメを利用することで「その場になくともライブの臨場感が味わえるようになった」と話す。

武田篤院長は「オリヒメは1日の大半をベッドで過ごす患者の心身を自由にする。活用の場を広げたい」と語る。

開発したオリイ研究所(東京)によると、入院患者の生活支援にオリヒメを取り入れた病院は東北で初めて。オリヒメは在宅テレワークや遠隔会議のほか特別支援学校、フリースクール、結婚式などでも利用されている。